

ドイツ語圏における実践神学の 方法の問題をめぐる一考察

— 実証的転換、行動科学としての展開、そして分化へ —

橋 本 祐 樹

1. はじめに

実践神学の展開において方法の問題はどのように問われてきたのであろうか。本稿の目的は、これまで日本の実践神学が重要な参照点の一つとしてきたドイツ語圏の実践神学を取り上げ、その実証的な展開に注意を向けながら、背景も含めて20世紀の実践神学の方法の問題に関わる動向と議論とを明らかにすると共に、それによってこれらの主題を日本の実践神学の俎上に載せることにあ
る。現代のキリスト教神学の展開における実践神学の自立と学際化の中では実践神学の基本的な意味と目標に関する議論が続けられており、そこにおいて鍵となる重要な主題には、実践神学の実証的展開やそれに関わる方法の問題が含まれている。ドイツ語圏の現代の実践神学において、実践神学の実証的な形態 (Empirische Gestalt der Praktischen Theologie) は、基本的な焦点の一つである¹。国内の実践神学の研究を省みると、これに類する実践神学については先駆的な指摘や取り組みはあるものかなり限定的であり、ドイツ語圏の現代の実践神学についてはその実証的な展開や方法の問題について十分な研究も紹介もされていない²。ゆえに本稿は日本の実践神学において本主題への関心を向ける寄与とな

1 Christian Möller, Einführung in die Praktische Theologie, Tübingen u.a. 2004, S.6-24.

2 ドイツ語圏の現代の実践神学に生ずる実証的な潮流や行動科学としての展開に対する日本の実践神学からの先駆的な言及ないし参照は少数ではあるが確かに見出される。森野善右衛門「序文」『総説実践神学 I』日本基督教団出版局、1989年、52頁。神田健次「研究ノート 新しい実践神学の Handbuch をめぐって」『聖書と教会』(1983年5月号) 日本

ろう。現代におけるドイツ語圏の実践神学の展開に関するドイツ語の論稿は数多あるが、ここでは本稿の中心問題となる方法の問題に焦点を当て、実践神学の実証的な潮流の中に自らの位置を定めてGTA (Grounded Theory Approach) という質的な研究方法を自らの実践神学に導入するスイス・ルツェルン大学の実践神学者、ステファニー・クライン (Stephanie Klein, 1957-) ——2012年から14年にはスイス実践神学連合会の会長も務めた——の論考「実践神学の自立における方法の問題」(2005)³を取り上げ、これを主たる手がかりにドイツ語圏の実践神学の展開について、方法の問題に焦点をあてて探求する。彼女の論考が、プロテスタントとカトリックの両面からこの主題を探求する点も興味深い。

本稿は、クラインの展開に拠って、第一にドイツ語圏の実践神学における「実証的転換」(1960年代)以前の文脈について確認した上で、第二に同領域における実証的転換とそれ以降の展開について、まずカトリックを中心に、次にプロテスタントを中心に上げていく。最後に、以上の内容に触れて、現代におけるドイツ語圏の実践神学の地平から若干の言及を添えて結びとしたい。

2. ドイツ語圏の実践神学における「実証的転換」(1960年代) 以前の文脈

本稿の掲げる主題に関連する、ドイツ語圏における「実証的転換」(1960年代)以前の実践神学の文脈を、クラインに拠って、第一に、カトリックの神学的展開から取り上げようとするならば、フランツ・シュテファン・ローテンシュトラウフ (Franz Stefan Rautenstrauch, 1734-1785)による『ドイツ語圏における牧会神学の図表的概説』(1778)⁴が挙げられる。ここに提示される牧会神学は、

基督教団出版局、1983年5月、49頁、及び「地域社会における教会の課題」『地域福祉と教会』キリスト新聞社、2018年、54-56頁。

3 Stephanie Klein, Die Methodenfrage in der Ausdifferenzierung der Praktischen Theologie, in: Erkenntnis und Methode in der Praktischen Theologie, Stuttgart 2005, S.38-53.

4 Franz Stefan Rautenstrauch, Tabellarischen Grundriß der in deutscher Sprache vorzutragenden Pastoraltheologie, Wien 1778.

キリストの3つの職務を基礎に「教育、分配、修養の義務」へと内容展開するものであり、この構成は第二バチカン公会議に至るまでの牧会学を特徴づけるものと見られる⁵。そして、この牧会神学は牧会者の実践に差し向けられ、「方法は応用（Anwendung）に結びついていた」⁶。クラインによれば、ここに認められる理論と実践の間に介在する問題は2つの方向に進展する。すなわち、一方は実践の改善のために経験に基づく知恵を用いる「理論を持たないプラグマティズム」へと、他方は教会の実践に「教会論的な原理を取り次ぐ科学的な努力」へと向かうのである⁷。経験的な知恵か、あるいは実践に関する科学的ないし神学的な応用科学への道かという議論のあり方がここでも立てられている。ドイツの養護教育者であり実践神学者であったリヌス・ボップ（Linus Bopp, 1887-1971）の術語を含んで、アドルフ・エクセラー（Adolf Exeler, 1926-1983）とノルベルト・メッテ（Norbert Mette, 1946-）は、この神学的状況を次のように表現する。

科学的方向と実用的方向の衝突は、その媒介事例としての牧会神学が、再び自らを理論的に把握しなければならないのか、あるいは神学研究の要石として理論的に学んだことを実践のために精錬すべきなのか、ならばむしろ牧会神学（Pastorale Theologie）ではなく牧会の応用科学（Pastorale Technologie）でなければならないのかという問題をめぐって燃え上がった⁸。

このような実践神学の科学的な性質と実用主義の間で揺れる牧会学のあり方そのものをめぐって生ずる議論の指摘から、クラインが注意を向ける点は、こ

5 Klein, a.a.O., S.39.

6 Ebd.

7 Ebd.

8 Adolf Exeler/Norbert Mette, Das Theorie-Praxis-Problem in der Praktischen Theologie des 18. und 19. Jahrhunderts, in: Ferdinand Klostermann u.a. (Hg.), Praktische Theologie heute, München u.a. 1974, S.74f.

のエクセラーとメッテの論述に表示される、理論から実践への一方的な傾斜を伴った見方に他ならない。

何れの方向も、実践は最高度の原理である理論によって整えられなければならない、ゆえにその媒介は理論から実践への道として基本的に考えられなければならないという点で一致する。すなわち組織・教義学の領域で展開された原理が、実践神学によって（科学的または実用的な仕方）実践に利用できるようにされねばならないとするのである⁹。

ここで実践は、神学的理論に比しては相対的価値を持たない位置に置かれているのである。クラインによれば、このような理解の傾向に対して、牧会学の実用的な方向を批判し、神学分野として独立した実践神学のための科学的な基礎づけを企図したのがカトリックのチュービンゲン学派の神学者であり、特にその名を挙げられるのはアントン・グラーフ (Anton Graf, 1811-1867) である。実践神学のそのような行き方は、しかし、新スコラ学の展開に——クラインの言い方を取ればその思弁的・演繹的な方法に——その位置を奪われることとなり、経験や帰納的な方法への言及は「モダニズム」を疑われることとなる¹⁰。とはいえ、実践神学の科学としての展開が制限を受ける中でも、種々の思想的潮流や心理学等との関わりの中にある多様な実践的運動（典礼、聖書、宣教、労働）は認められるのであり、それらは第2バチカン公会議に結実する神学の方向と方法の備えとなっていくのである¹¹。

第二に、実践神学の方法の問題に関連して、ドイツ語圏における「実証的転換」以前の実践神学の文脈を、クラインの視点から、プロテスタントの神学的展開より取り上げようとするならば、最初に科学的な実践神学の展開として挙げられるのはフリードリヒ・シュライアマハー (Friedrich Schleiermacher,

9 Klein, a.a.O., S.39f.

10 Norbert Mette, Praktische Theologie in der katholischen Theologie, in: Christian Grethlein u.a. (Hg.), Geschichte der Praktischen Theologie, Leipzig 2000, S.545.

11 Klein, a.a.O., S.40.

1768-1834)の『神学通論』(1811)である。彼は、神学に新しい基礎を与えることを企図し、実践神学を「積極的科学」(Positive Wissenschaft)、「実践の理論」(Theorie der Praxis)として定義したが、その関心は教会指導の技術論(Kunstlehre)ないし技術(Technik)の練成にあり、これには応用を定めない内容が含まれ、その意味では実践に対する原理的なものの「機械的適用」への対峙が見られるとされる¹²。このシュライアマハーの影響下で展開した自由主義神学に属する次のような実践神学者たち、すなわちパウル・ドリユース(Paul Drews, 1858-1912)、オットー・バウムガルテン(Otto Baumgarten, 1858-1934)、フリードリヒ・ニーベルガル(Friedrich Niebergall, 1866-1932)、リヒャルト・カービッシュ(Richard Kabisch, 1868-1914)、マルティン・シアン(Martin Schian, 1869-1944)は、現実世界や人間への実証的な接近の構想への関心をすでに表示していた¹³。そのうちの一人、ドリユースは実践の対象や舞台ともなる社会世界への洞察をめぐって次のように述べている。

これについて一つの像を十分に描こうとする上で、欠けが多く、不完全で一面的なものに過ぎない個人的な観察だけに留まっているとすれば、それに最終的にどんな価値があるというのか?ここでは科学的認識がそのような興味本位の遊びに取って代わらなければならない¹⁴。

すでに第一次大戦以前の1910年に、社会や人間の現実に対する科学的な仕方での接近が不十分であることを指摘するのである。さらに彼は大学の領域における実践神学の展開と、現実の社会や教会の領域における実践に直接的に仕える実践神学の展開との区別を求め、加えて実践神学の学術的な性格については

12 Ebd.

13 Michael Meyer-Blanck/Brigit Weyel, Arbeitsbuch Praktische Theologie, Gütersloh 1999, S.47-49. Christian Grethlein/ Michael Meyer-Blanck, Geschichte der Praktischen Theologie im Überblick-Eine Einführung, in: Christian Grethlein u.a.(Hg.), Geschichte der Praktischen Theologie, Leipzig 2000, S.24-27, 31-33. Klein, a.a.O., S.41.

14 Paul Drews, Das Problem der Praktischen Theologie, Tübingen 1910, S.55. Klein, a.a.O., S.41.

単なる個別領域の組織化ではなく教会研究 (Kirchenkunde)、宗教民俗学、宗教心理学等を通じた、この世と人間の現実に関する探求によって担保することを訴える¹⁵。その意味は次のように表明される。

私たちの見解によれば、実践神学は体系的・演繹的 (systematisch-deduktiv) にではなく、記述的・帰納的 (deskriptiv-induktiv) に遂行されねばならない。…中略…神学的実践者である牧師が、実りある、目的自覚的な、自ら納得できる仕方で福音を告知しようと望むならば、自らが働きかけようとしているグループの宗教的生の状態について正確に知らねばならないのである。そこでの宗教的な必要が何であるかを、そして実際に生を保持して規定しているその敬虔さの性質がどのようなものであるかを理解する必要がある¹⁶。

実践の対象が恣意的な印象のもとで曖昧に、偏ったものとして規定された上で、実践における告知、奉仕、交わりの内容と形式が設定されるとすれば、そのような企てはどのような結果を招来することになるのであろうか。対象に対する予断のない帰納的な探求こそが福音の告知に有効に働くものと見出される。これのみを持って実践神学の意義や役割が全く担保されるとは言えないにしても、対象とその実態に相応しい実践の構想のために、それらについてのより確かな解明は求められよう。クラインいわく、早逝したドリユースの後に続いたのはニーベルガルとバウムガルテンの二者であるが、とりわけ特筆されるのは宗教心理学の参照に加えてドリユースの宗教民俗学の構想を踏襲する前者であり、彼は研究のための資料として現に生ける個々の人間への直接的な照会を推奨する¹⁷。というのも、次のように理解されるからである。

15 Christian Grethlein/Michael Meyer-Blanck, a.a.O., S.26.

16 Paul Drews, „Religiöse Volkskunde“: eine Aufgabe der Praktischen Theologie, in: Monatsschrift für kirchliche Praxis, 1901, S.1.

17 Klein, a.a.O., S.41.

むしろ人間は、私たちが自らの理論において夢想する内容とは異なる仕方
方で常々存在する。だからこそ、継続的で親密な関係の中で、繰り返し研
究されなければならないのである¹⁸。

実践が営まれる現実の生の地平を通り過ぎ、原理的な理想や実践する者の思
惑のみをただ振りかざすことではなく、そのような議論を生ける人間の現実
によりよい仕方ですら差し向けるために実践神学が対象のより明確な規定を
求めることは有用であろう。実践神学は「実証的な基礎の上で自らの時代の
生の問題に条件なしに向き合い、そのための前進への答えを見出すべきな
のである」¹⁹。しかし、当時における神学的な意義を否定するものではない
が、ドイツ語圏の実践神学におけるこのような実証的な志向をもった接
近はその前進を阻まれることとなる。クラインは、実践神学者ラインハ
ルト・シュミット-ロスト (Reinhard Schmidt-Rost, 1949-) の言葉を
引きながら、次のように述べている。

弁証法神学の覇権により、このアプローチは第一次世界大戦後にドイツ
語圏で押しのけられていった。…中略…戦争の出来事に対する宗教的な誇
張への抵抗と、文化プロテスタンティズムへの鋭い限界付けの中で教義学、
聖書解釈、告知への集中が結果した。この神学は「実践神学の理論と実践
の媒介機能を要求することなしに、教義的な神学として直接、実践的に作
用した」[シュミット-ロスト]。弁証法神学は実践神学を神の言葉の教説
に従属させたのである²⁰。

第一次大戦後、ドイツ語圏の神学領域において指導的な位置を取ることになっ

18 Friedrich Niebergall, Die Kausalrede, Leipzig 1905, S.37.

19 Achim Plagantz/ Ulrich Schwab, Religionswissenschaftlich-empirische Praktische Theologie: Friedrich Niebergall, in: Christian Grethlein u.a.(Hg.), Geschichte der Praktischen Theologie, Leipzig 2000, S.242.

20 Reinhard Schmidt-Rost, Zwischen den Zeiten. Praktische Theologie im Umfeld der Dialektischen Theologie, in: Christian Grethlein u.a.(Hg.), Geschichte der Praktischen Theologie, Leipzig 2000, S.511. [] 内の補足は引用者による。Klein, aa.O., S.42.

た弁証法神学が神の超越性や神と人間の間にある断絶について強調し、その断絶に触れて神の言葉への信仰を通じた弁証法的な克服を説くとすれば、そのような神学における人間的な経験の意味とは何になろうか。弁証法神学の影響下で展開した実践神学の形成の意味を、クラインは実践神学者ゴットヴィン・レンマーマン (Godwin Lämmermann, 1947-) の次の言葉から明らかにする。

その実践神学は独自の対象を持たず、そして実証的な対象 (Empirischer Gegenstand) を全く持たない。その実践的な責任は、ただ神の言葉の真理を証言の継続的履行の中で新たな出来事へと至らせることのみにある。いずれにしても、弁証法的な庇護の下での実践神学は再び教義 - 積極的 (dogmatisch-affirmativ) に規定されるに違いないことは明白である。すなわち、教義的に演繹された神の言葉の優位性とその自己作用によって実践神学の唯一の正当な課題としての告知が生じるのである²¹。

弁証法神学の影響下に立つ実践神学は独自の「実証的な対象」を持たず、その目標は神の言葉の証言を通じた出来事への結実にあると見られる。「演繹された」神の言葉の優位性の下にある神学議論の方向は、個々の特殊な具体的事柄を通じて一般に通ずる命題や法則を見出そうとする帰納的な神学議論の余地を生み出さない。クラインは、そのような教義的に形成された神学の人間的生や実践への影響の意味は反省されないままに留まって、「実践神学は重要性を失っていった」と述べている²²。弁証法神学の隆盛は、それ以前に展開を始めていた実践神学の実証的な潮流を押し留めたのである。

21 Godwin Lämmermann, Einleitung in die Praktische Theologie: Handlungstheorien und Handlungsfelder, Stuttgart u.a. 2001, S.34.

22 Klein, a.a.O., S.42.

3. ドイツ語圏の実践神学における 1960 年代の転換と以降の展開—カトリックを中心に

現代のドイツ語圏の実践神学の展開については、クラインによって、「1960 年代にドイツ語圏の実践神学の議論は根本的に変化した」とまで明言される。そのような根本的な変化を言われるところの神学的展開の内実とは何であるのか。先の引用をも含めて続けるとこのように言われる。

1960 年代にドイツ語圏の実践神学の議論は根本的に変化した。実践神学は、神学的な応用科学及び神学的な応用理論としての、一部に存在していた自己理解によりやく別れを告げ、独立した実践的の科学として、実践理論として、構想されたのである。これには科学理論的な基盤を構築する必要があったが、そのためには今後数十年間にもわたる労力が必要であり、方法の問題について議論する余地はなかったのであった²³。

神学的原理の現実への応用を問う実践神学の理解から離れて今や独立した実践の学として実践神学が構想されるが、そのような実践神学の独立のプロセスにおいて問われたのは独立した科学としての基礎付けの問題であった。方法との関連から言えば、「多くのエネルギーがその合意形成の過程に吸収され、細分化された方法論の構築には不足があった」のである²⁴。

クラインの議論の組み立てに依拠して、第一に、カトリックの実践神学から取り上げるならば、実践神学の新たな理解への基礎を築いたのは第 2 バチカン公会議となるが、その実践神学の新たな理解はカール・ラーナー (Karl Rahner, 1904-84) が共同編集者として関わった全 5 巻の牧会学のハンドブック (Handbuch der Pastraltheologie, Freiburg 1964-72) においてまずもって表明

23 Ebd., S.42f.

24 Hermann Steinkamp, Zum Beispiel: Wahrnehmung von Not. Kritische Anfängen an den gegenwärtigen Entwicklungsstand einer praktische-theologischen Handlungstheorie, in: Ottomar Fuchs (Hg.), Theologie und Handeln, Düsseldorf 1984, S.183.

されたと見られている²⁵。その文献から表示される、実践神学が参照すべき対象としての教会の理解に関しては次のようになる。

教会の不変的な本質を一義的に記述しようと試みる教義的な、あるいは本質的な教会論とは対照的に、実践神学は、教会が具体的で歴史的なものであるところで教会を問題とし、社会学的 - 神学的な分析 (soziologisch-theologischen Analyse) の助けを借りて、救いの牧会の今日的遂行のための実践的な行動原理を獲得しなければならない²⁶。

永遠不変の教会の本質的、一義的な解明とは異なり、実践神学が課題とするのは歴史において具体的な形態を表す現実の見える教会であり、この教会とそこに関わる人間をめぐって神学のみならず他の学問領域の手法と分析をも参照しながら、今日の実践のための「行動原理」を求めることを訴える。クラインによれば、実践神学の歩みは、その後「行動科学」(Handlungswissenschaft)としてさらに整えられていくが、それは人間の生ける実践、行動の法則を学際的な連携のもとに総合的に問う科学であった(H・シェルスキー)²⁷。このような実践神学の行動科学的なアプローチの基礎付けを導いた人物として、クラインが挙げ、一定の分量を割いて論ずるのは、実践神学者ヘルムート・ペウカート(Helmut Peukert, 1934-)とノルベルテ・メッテ(Norbert Mette, 1946-)の二者に他ならない。まず、前者、ペウカートの実践神学の理解を取り上げるならこうである。

実践神学とは、身を切るような懐疑的な経験のもとにある私たちの具体

25 Klein, a.a.O., S.43.

26 Karl Lehman, Karl Rahner und die Praktische Theologie, in: Zeitschrift für Kathorische Theologie 126, 2004, S.11.

27 ドイツの社会学者ヘルムート・シェルスキーが提示したこの概念を、1967年に神学の文脈に導入したのはゲルハルト・クラウゼであったという。Norbert Mette, Praktische Theologie als Handlungswissenschaft. Begriff und Problematik, in: Diakonia 10, 1979, S.190f.

的な社会において、アイデンティティを可能なものにしようとする行動の明白な理論であり、そのアイデンティティは行動パートナーに向けられた神の無条件の慈しみに負っている——すなわち、他者のための行動においてその都度、常に前提とされ、実践的に実現されねばならない慈しみに。この行動は社会的次元における共に生きる世界の構築、ひいてはそれによる社会制度の構築をも目指すのである。そこでは無条件の相互承認が自らのアイデンティティの条件であり、キリスト教的伝統において神と呼ばれる究極的な解放の自由を経験する場所が問題となる²⁸。

ペウカートのこのような実践神学の理解は「指導的なものとなった」と評される²⁹。彼において神学は、神の慈しみを、人間が相互的承認をもって供与し合う、伝達的な行動の分析に結びつけられている。実践神学の行動科学的な方向をさらに発展させたものとして、クラインによって挙げられるのがメッテであり、その実践神学の特徴について彼が挙げる要点は次のようになる³⁰。すなわち、まず教会の教義からではなく人々の経験から出発する帰納的な方向であり、次に「それを通じてのみ、実践から出発するという主張が科学的な仕方で正当なものとなる。一次的な経験はそのためには十分ではない」と言われる通り、実証的研究方法の活用である³¹。加えて学際的な性質が挙げられ、他の学問領域との協働こそが実践神学による課題への対処の鍵と見られている³²。

28 Helmut Peukert, Was ist eine praktische Wissenschaft? Handlungstheorie als Basistheorie der Humanwissenschaften. Anfragen an die Praktische Theologie, in: Ottomar Fuchs (Hg.), Theologie und Handeln, Düsseldorf 1984, S.76f.

29 Klein, a.a.O., S.44.

30 Ebd., S.45.

31 Norbert Mette, Praktische Theologie als Handlungswissenschaft. Begriff und Problematik, in: Diakonia 10, 1979, S.190-203, 191. Klein, a.a.O., S.45.

32 Ebd. 付言すれば、続けて名をあげられる神学者にステファン・クノープロホがいる。彼は、神学を「駆り立てるもの」として人間の経験を認め、そこから実践神学の議論を発展させることを構想し、実際にその構想によって牧会学を展開した。

4. ドイツ語圏の実践神学における 1960 年代の転換と以降の展開—プロテスタントを中心に

第二に、クラインの議論の展開に依拠して、プロテスタントの領域における実践神学の展開がここで問題となる。このように端的に言われる。

プロテスタントの実践神学においても新たな急進的立場が生じた。弁証法神学の優位性は 1960 年代に弱まっていた。カール・バルトの神学との分離の中で実証的・社会科学的な転換 (Empirische und sozialwissenschaftliche Wende) が生じ、その転換は 1970 年代から 80 年代にかけて実践神学の行動科学的な展開を結果した。新時代の始まりを告げたのは 1968 年に発表されたクラウス・ヴェーゲナストの論文「宗教教育における実証的転換」であった³³。

20 世紀後半のプロテスタントの実践神学が「転換」を迎える重要な背景として指摘されるのは弁証法神学ないしバルト神学の影響力の低下であり、その上で生ずるのが実践神学の 1960 年代末の実証的転換と、以降 70 年代から 80 年代にかけての行動科学としての実践神学の形成である。そして、ドイツ語圏の実践神学の新しい進展を表示する象徴的、決定的な契機としてやはり挙げられるのは 1968 年のヴェーゲナスト (Klaus Wegenast, 1929-2006) による論文「宗教教育における実証的転換」³⁴であった。クラインの議論を超えて補えば、ヴェーゲナストは次のように述べている。「私たちは宗教教育の実践に関する徹底的に主観的な印象から離別しなければならない。何れにせよ、私たちの偶発的な印象を宗教教育の有効なイメージへと据え上げることを回避せねばならないのである」³⁵。ここで言われることの焦点は、神学における主観主義や客観主義の間

33 Klein, a.a.O., S.46.

34 Klaus Wegenast, Die empirische Wendung in der Religionspädagogik, in: Zeitschrift für Pädagogik und Theologie 20, 1968, S.111- 125.

35 Ebd., S.115.

題というよりも、教条主義的な理念的教育論の下にある人間の経験的な現実の解放である。それは「理想による独裁に直面している実証的現実 (Empirische Wirklichkeit) を助け起こし、偽りとなった標語の圧政——それは人間に自分自身であることを許さない——を克服することを意味していた」(C・メラー)³⁶。ヴェーゲナスト自身、自らの論文の冒頭で、ドイツの教育学者ハインリッヒ・ロート (Heinrich Roth, 1906-1983) の言葉を借りて次のように象徴的に語らせている。

実証的な研究は…中略…理想と現実の間の矛盾を明らかにし、私たちの教育的な美しい言い繕いの幻想を剥ぎ取る好機であり、偽りと化した言葉の暴政下での隷属を断ち切る…中略…助けとなるであろう³⁷。

クラインによれば、このようなプロテスタントの実践神学の「転換」の意味の一つは、社会科学領域の実証的方法に関する「同時展開的な」議論への新たな接続である³⁸。クラインの議論は以降も方法の問題とその基礎付け、これらに関連する実践神学の基本的枠組みの構築をめぐる課題に向けられるのであるが、実践神学の新たな転換の指摘の上で、このように言われる。

実践の理論としての実践神学の自己理解によって社会的現実に関する科学的理論に到達し得るための方法の問題が生じた。この問題は他の人間科学の諸分野と共通するものである。今や、実践神学が他の人間科学に由来する種々の方法と結果にいいよ視野を開いたために、それらとの関係が考察され、基礎付けられねばならなかった。…中略…プロテスタントの実

36 Möller, aa.O., S.14.

37 Heinrich Roth, Pädagogische Anthropologie I: Bildsamkeit und Bestimmung, Hannover u.a. 1966, S.99. Wegenast, aa.O., S.111. 引用文の省略はヴェーゲナストによる。

38 Klein, aa.O., S.46. この時代にすでにその名を挙げたニーベルガルの実践神学の手法を再び取り上げたのはヘニンク・ルター (Henning Luther, 1947-1991) であるが、それはなおも「基本的なものとなっている」とされる。

実践神学はますます実証的方法に自らを向けるようになるが、その他方で、カトリック神学では、ヨゼフ・カーディン（Joseph Cardijn）が開発した「観察する - 判断する - 行動する」という3ステップ・モデルが、この分野の新しい自己理解に合致する有効な帰納的アプローチとして認められた³⁹。

有効な実践的構想のために、現実には生ける人間の経験に対峙しようとする実践神学は、果たしてどのような科学的方法をもってその実証的现实を理論へともたすことができるのであろうか。そして、その方法を、いかなる神学的枠組み、基礎付けをもって理解し、説明することができるのであろうか。個々を詳論する余地はないが、クラインが、ここではカトリックの神学的展開に視線を改めて含みながら、この問題を根本的に提起した者として挙げるのは1980年代の初頭のノルバルト・メッテとヘルマン・シュタインカンパ（Hermann Steinkamp, 1938-）、そしてヨハネス・A・ファンデアフェン（Johannes A. van der Ven, 1940-2019）による学際的な対話モデルである⁴⁰。さらにカーディン同様、今日まで意義ある方法として認められるものとしてロルフ・ツェアファス（Rolf Zerfaß, 1934-）の「制御系モデル」（Regelkreismodell）が指摘される⁴¹。引用で触れられた3ステップ・モデルについて取り上げれば、これには複数のヴァリエーションが認められるが、その一つは科学的な状況分析を内容とする観察（Sehen）を経て、伝統、教会的社会教説、神学の光の下での評価を内容とする判断（Urteilen）へと進み、そこから実践のための構想を内容とする行動（Handeln）に展開するものである⁴²。

さらに実証的転換以降の重要な考察としてクラインが参照し、自らの議論に接続するのは、プロテスタントの実践神学者ヘニク・シュレーア（Henning Schröer, 1931-2002）の論考である。『今日の実践神学』（1974）において彼もまた「実践神学の研究方法」の主題を論ずるが、そこで次のように認める。「神

39 Ebd., S.46. 省略は引用者による。

40 Ebd., 1.4.1-1.4.2.

41 Ebd., 1.4.3.

42 Ebd., S.89.

学の歴史分野とは対照的に実践神学はまだ十分に発達した方法的手段を持たず、そして確かな方法的規範を持っていない]⁴³。このような実践神学の方法とその規範の欠けの認識の上で、シュレーアは行動科学としての実践神学の自立的な展開を求めるのであるが、そこで必然的に生ずるといふ神学の他分野との緊張関係をも念頭に置きながら、実践神学に求められるあり方を次のように消極的に規定する⁴⁴。

このような研究方法をめぐる状況は、次のことを要求する。すなわち、実践神学が、a. そのプロレゴメナを自ら論じ、教義学に委ねることをしないこと。b. いかにもどこでという問題の説明としてのみ自らを理解することではないこと。c. あらゆる神学の認識を導く連続体としての信仰を放免することなく、d. 教義と実践の関連を看過しないこと⁴⁵。

クラインは、このシュレーアの議論との対話の上で、自らの研究を通して実践神学の方法と、方法を支える基礎付けの議論を展開するようである。クライン自身が、シュレーアの言葉を引きながら、次のようにいくらか積極的に実践神学の方法の展開についての筋道を表示している。

方法の問題の展開は、社会科学からは教育学的、心理学的、社会科学的方法の採用によって、科学理論的な分析からは歴史編纂的(historiographisch)、解釈学的、現象学的、実証的、また場合によっては弁証法的方法との区別によって遂行されるべきであり、そして具体的な教会の問題から出発することによって遂行されるべきなのである⁴⁶。

43 Henning Schröer, *Forschungsmethoden in der Praktischen Theologie*, in: Ferdinand Klostermann u.a. (Hg.), *Praktische Theologie Heute*, München u.a. 1974, S.206-224, 206.

44 Ebd., S.211.

45 Ebd., S.212.

46 Klein, a.a.O., S.47.

実践神学が、教会と、これに関わる社会の特定の集団やそこに息する人々の経験を、神学的考察の対象ないし資料として取り上げようと考え、そのための適切な学術的方法を求め、実際に採用するとすれば、そこでそのような研究はいかなる意味で他の学問領域の研究ではなく実践神学のそれと言い得るのか。「区別によって遂行されるべき」としても、シュレーアの基本的な行き方としては、「現象学的方法の再生と刷新が実践神学的に不可欠である」ということであり⁴⁷、クラインの言葉を用いてさらに言えば、「フッサールが展開した生活世界の問題を実践の概念において捉えるべきであるとすれば、このことは必然的となる」⁴⁸。シュレーアは研究計画、合同研究、情報交換等に関連して幅広い提案を行うが、クラインいわく「これらの要求の多くは満たされなかった」⁴⁹。というのも、実践神学の方法とその理論的基礎付けをめぐる関心は衰退し、新しい科学の基礎研究にその注意を奪われたからであり、クラインはちょうどシュレーアの論考の10年後に著されたシュタインキャンプの研究（1984）から次のように語らせる⁵⁰。

実践神学は過去10年間に重大な理論と信頼の欠損を処理せねばならず、そこではとりわけ科学理論的な諸問題に埋没したがために、実証的研究、特に質的な社会研究の領域での発展を十分に受容することができず、ましてやこれらの発展に自立的に関与することもできなかったのである⁵¹。

重大な「欠損」という言葉を引く際に、クラインが示唆的に表示するのは、ドイツ福音主義教会（EKD）における教会離脱者の数の増大であり、それに関

47 Schröder, a.a.O., S.219.

48 Klein, a.a.O., S.47.

49 Ebd.

50 Ebd., S.47f.

51 Hermann Steinkamp, Zum Beispiel: Wahrnehmung von Not. Kritische Anfänge an den gegenwärtigen Entwicklungsstand einer praktisch-theologischen Handlungstheorie, in: Ottomar Fuchs (Hg.), Theorie und Handeln: Beiträge zur Fundierung der Praktischen Theologie als Handlungstheorie, Düsseldorf 1984, S.177-186, 186.

連して生ずる教会メンバーに対する、所属をめぐる主として量的な手法を用いた定期的な調査である⁵²。とは言え、このような曲折はあったものの、「1980年代半ば頃までは、実践神学の新しい自己理解のための基盤は行動科学的なアプローチとその理論的基礎付けに見出されていたと思われるのである」⁵³。先に引用されたシュタインキャンプも、1984年の時点で、「行動科学としての実践神学を構想する際の道筋についてのますます拡大するコンセンサス」を認めており、その上で「このコンセンサスは最小限で曖昧なものであり、実践神学的な行動理論の仕上げについてはせいぜい序曲の段階にある」と確認したのであった⁵⁴。

以上のようにカトリック及びプロテスタントの実践神学において見出された行動科学としての実践神学に関するコンセンサスは、クラインによれば、1980年代半ば以降、同程度に解消されると言われる⁵⁵。そこからは「異なる種々のアプローチが展開されたのであり、それは全く結ばれないまま併存して立っている」⁵⁶。だとすれば、ここで述べられる80年代半ば以降にドイツ語圏の実践神学において展開した種々の異なるアプローチとは何であるのか。すでに示唆されたが、クラインがまず取り上げ、自身の研究でも採用することになるのは実践神学の現象学的な展開である。「特にプロテスタントの実践神学では行動に関する従来の焦点が拡大され、認識に対して特別な注意が向けられるようになった。この関連において現象学が新たに取り上げられ、異なる進路が見出されることになる」⁵⁷。ここからその名を挙げられるのは、宗教現象学的・宗教史的アプローチを用いて聖なるものの認識の現象学を展開するマンフレット・ヨズッティス (Manfred Josuttis, 1936-2018)、現象学的基礎の上で認識に関する実践神学的アプローチに取り組むハンス・ギュンター・ハイムブロック (Hans-Günter Heimbrock, 1948-) とヴォルフ・エックカート・ファイリンク (Wolf-Eckart

52 Klein, a.a.O., S.47. Anm.88.

53 Ebd., S.48.

54 Steinkamp, a.a.O., S.182.

55 Klein, a.a.O., S.48.

56 Ebd.

57 Ebd.

Failing, 1944-2021)、そしてカトリックに関連しては現象学に基づいて「応答する行動」の実践神学的アプローチを展開したラインハルト・ファイタ (Reinhard Feiter, 1956-) であるが、クラインは従来の実践神学の現象学的なアプローチと方法に関する基礎づけは尚も不十分であると考えており、本稿が参照する論考を含む彼女の研究はこの点での貢献を意図している⁵⁸。さらに、1980年代半ば以降、このような実践神学の行き方に加え、多くのアプローチが生じたと指摘される。

これらの現象学的な方向に加えて他の多くのアプローチが展開された。すなわち体系論的、行動理論的、審美的、文化科学的なアプローチ、種々の実用主義的な構想、経営学的な組織モデルを指向するアプローチ、現実適用の方策への関心を柱として基礎理論的考察の展開を軽視するアプローチである。さらに、ポストモダン的なアプローチ、思弁的な構想、暗黙的ないし明示的に演繹的な神学の応用モデルを再び広めることで行動科学の自己理解から離れるアプローチも現れた⁵⁹。

各々のアプローチは問題設定、枠組み、構想等においてしばしば重なり合いを持ち、立場の境界は曖昧であると見られ、このような種々のアプローチが混在する状況については、「この学問分野の急速に展開した分化と見通し難さ」との言葉をもって表されているが、何れにしてもクラインの問題意識は、実践神学の方法の問題がこれらの取り組みの中でも大抵主たる役割を果たしていない点にある⁶⁰。「目下、関心は方法についての発展や基礎付けよりも、むしろ様々な理論的構想の展開や特徴化にある」からである⁶¹。個々に「用いられる方法は理論的枠組みと同様に非常に多様である。しかし、それぞれの理論的アプローチの基礎付けがまず問題になっているのであって方法に関する包括的な考察はな

58 Ebd., S.48f.

59 Ebd., S.49.

60 Ebd.

61 Ebd.

されない」⁶²。1980年代後半以降に生じた多様な実践神学のアプローチを確認しながら、自身の研究の展開に向けてこのような実践神学の方法をめぐる批判的な指摘をした上で、尚も実証的な研究の増大について言及し、そこから改めて実践神学の適切な方法論について問うクラインの言葉は、一つには、多くの方向をもった実践神学の種々の展開も決して同程度に並列するのではないことを示唆するようである。

社会的現実とその社会的な構成プロセスに関する細分化された科学的認識に到達する必要性は、実証的研究の増加を結果した。実証的な神学に対する批判的な反論は、幅広い議論と、根本的で神学的な、そして基礎理論的な基礎付けの必要性を明らかにする。まさに今日、大学に足場を置く実践神学は、科学的に基礎付けられ、かつ学際的に説明可能な方法論に関する問題に直面している⁶³。

クラインのこの言葉は、もちろんまず、実証的転換を経た実践神学が置かれた場と、そこで求められる実践神学の学問としてのあり方についての表示に他ならない。彼女の研究についてこれ以上の範囲を辿ることは本稿の設定を超え出るが、とりわけ現象学の議論の詳細な参照と考察を経て、最終的に実証的な質的研究の方法であるGTA (Grounded Theory Approach) によって先の課題に応える一つの可能性が見出されることになる。

5. 終わりに—ドイツ語圏における現代の実践神学からの補足的考察

クラインの論考を手がかりに、カトリック、プロテスタント双方の領域に渡って、ドイツ語圏の実践神学の実証的展開と方法の問題をめぐって、その背景の

62 Ebd.

63 Ebd., S.50.

確認を経て、1960年代以降から生じた実践神学の実証的転換、行動科学としての形成、その後の種々の方向を伴った展開に関して論述を進めてきた。最後にドイツ語圏の現代の実践神学の視点から、クラインの視点や議論に関わる補足的な論述を加えておきたい。まず、「実証的な神学の類型」を取り上げるペーター・マイヤー（Peter Meyer, 1978-）は、その研究において実証的な神学展開に特徴的な3つのモデルを区別して論じている。すなわち、実証的な諸科学における方法の神学的適用のモデル（Theologische Applikation Empirischer Wissenschaften）であり、次に生きた宗教的経験をめぐる哲学的・認識論的な行き方に密接に関わる組織神学的なモデル（Philosophisch-systematisch: Lebendige religiöse Erfahrung）であり、最後に一定の基準のもとで自ら経験的になることを求める実践神学的な領域内のモデル（Praktisch-theologisch: intradisziplinäres Modell Empirischer Forschung）である⁶⁴。この区分の上で言えば、クラインは第二のアプローチから自らの実践神学の方法に関する基盤を求めた上で第一の行き方へと展開することが理解され、マイヤーの視野においては彼女のアプローチ全体が実証的な神学の内側に包摂されることが示唆される。

次にクラインが言及していた1980年代半ば以降の「急速に展開した分化と見通し難さ」を伴ったドイツ語圏の実践神学の展開に関しては、まずハイデルベルクの実践神学者クリスティアン・メラー（Christian Möller, 1940-）による考察を提示しておきたい。彼が20世紀のドイツ語圏の実践神学の展開を取り上げる際、その焦点としたのは「ケリュグマ的」（kerygmatisch）、「霊的」（spirituell）、そして「実証的」（empirisch）な3つの潮流であった⁶⁵。過度な単純化の懸念はあるが、クライン自身も1980年代半ば以降の実践神学の展開を叙述する流れにおいて「社会的現実とその社会的構成のプロセスに関する細分化された科学的

64 Peter Meyer, Typen Empirische Theologie: Forschungsansätze, Kontroversen und Erträge. Ein forschungsgeschichtliche Exkurs, in: Hans-Günter Heimblock u.a. (Hg.), Einführung in die Empirische Theologie: Gelebte Religion erforschen, 2007, S.26-42.

65 Möller, aa.O., S.1-24.

認識に到達する必要性は実証的研究の増加を結果した」⁶⁶と述べるように、種々の実践神学の展開の中で実証的なそれに一定の位置を見出していることは示される。そもそもマイアーの視点から言えば、彼女の取組みは全体として実証的なものと見られ得る。

加えて、現代のドイツ語圏の実践神学の領域で評価される新しい『実践神学』(2020)⁶⁷——近年の実践神学総論としてハイデルベルクの実践神学者ヘルムート・シュヴィア(Helmut Schwier, 1959-)は高い評価を与えた——を著した、イゾルデ・カルレ(Isolde Karle, 1963-)による、多様な実践神学の展開に関する以下の論述も示唆を含むように思われる。

このように様々な方法、理論、対象領域がある中で、実践神学の統一的な課題や統一的な主要概念を同定することは容易ではない。近年では、とりわけ福音のコミュニケーション(Kommunikation des Evangeliums)という概念を通して、このような統一が試みられている。クリスティアン・グレットラインは構想的に実践神学を現在における福音のコミュニケーションの理論として定義する⁶⁸。

カルレは、同様の概念による試みを進めたグレットライン以外の多くの実践神学者を指摘した上で、実践神学の統一に向けて用いられるこの概念が「現在では特に高い妥当性を持つ」と述べている⁶⁹。この概念をドイツ語圏の神学的議論に導入したエルンスト・ランゲ(Ernst Lange, 1927-1974)は、固定化、形骸化する教会組織や、神の言葉の告知への一方的で排他的な集中をこれによって乗り越えようとしたのであったが、今やこの概念は多様化し、分化する実践神学の統一的な理解の鍵と見なされているのである。

66 Klein, a.a.O., S.50.

67 Isolde Karle, Praktische Theologie, Leipzig 2020.

68 Ebd., S.16f.

69 Ebd., S.17.